広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要 XXV 2013. 3. 22

岐阜県古川小学校の「ふしづくりの教育」を支えた中家一郎校長の音楽教育観（1）

吉 富 功 修
（本学名誉教授）
三 村 真 弓
（本学大学院教育学研究科）

The Music Educational Philosophy of Ichiro NAKAYA Supporting 'FUSHIZUKURI EDUCATION' as the Principal of FURUKAWA Elementary School in GIFU Prefecture (1)

Katsunobu YOSHITOMI Mayumi MIMURA

I はじめに

岐阜県吉城郡古川小学校で実践され，輝かしい成果を挙げた「ふしづくりの教育」は，わが国の音楽科教育における記念碑である。昭和41年度の岐阜県の小学校音楽科の研究指定校が古川小学校に決定したのは，当時飛騨教育事務所の課長であった中家一郎が，岐阜県の指導主事であった山本弘の相談を受け，自らの母校であり，かつての勤務校でもあった古川小学校を推薦したからである。そして，昭和42年には，自らが母校古川小学校の校長となり，学校運営に絶大な手腕を発揮した。そして，一貫して「ふしづくりの教育」を支え，その発展に大きく貢献した。本研究では，これまで語られることのなかった中家一郎校長の音楽教育観を明らかにし，「ふしづくりの教育」にどのように影響を与えたのかを解明することを目的とする。紙面の都合上，本稿（1）と本稿（2）に分けて論ずる。

「ふしづくりの教育」は，古川小学校で，昭和41年度から昭和52年度までの12年間に実践された音楽科教育法である。昭和36年から5年間岐阜県教育委員会の指導主事を務めた山本弘の3つの著作，『音楽教育の診断と体質改善』（1968），『音楽教育を子どものものに』（1973），『誰にでもできる音楽の授業—ふしづくりの音楽教育紙上実技講習—』（1981）（いずれも明治図書刊）は，「ふしづくりの教育」の概要を知るために必読すべき書である。これらの著書には，「あとがき」に「研究成果を利用させていただいた方々」として，多くの人名が挙げられている。例えば，「中でも信念にあふれた……中家一郎校長の面影が浮かんでくる」（山本 1981, p. 160）のような紹介の仕方である。昭和41年から昭和49年まで古川小学校で音楽科主任として「ふしづくりの教育」を直接実践した山﨑俊宏や，当時飛騨教育事務所の指導主事として「ふしづくりの教育」を直接指導した中村好明に関しても同様に紹介されている。

しかし，中村好明の子息である中村隆夫氏が述べているように，「ふしづくりの教育は特定の教師がつくりあげた訳ではない。現場の多くの教師が子ども達と共につくりあげた成果だといえる」（中村 私家版，p. 3）のであれば，その現場の教師集団を統率した中家一郎校長の存在にも当然のことながら注目しなければならない。山本弘が退職後に自費出版した『授業』で紹介した，「古川小学校ではこれに輪をかけた研究の雰囲気であった。私が校長室を尋ねた折りもよく職員が校長室で，授業を見て貰った反省を語りあっておられたから，職員が進んで授業を見て貰うという文字通り毎日が研究授業だったのだろう」[1] というエピソードからも，中家一郎校長のリーダーシップが読み取れる。

Ⅱ　中家一郎の略歴

中家一郎は，現在の飛騨市古川町の生まれである。古川尋常高等小学校に学んだ中家は，昭和4年に15歳で岐阜師範学校に入学し，同9年に同校を卒業し，高山南尋常高等小学校に赴任した。昭和11年（22歳）には教職をいったん辞し，岐阜師範学校専攻科に入学した。翌12年には専攻科を修了し，高山西尋常高等小学校に赴任している。昭和17年(28歳)には，古川国民学校に転勤し，10年間を同校で勤務した。その間，昭和22年（33歳）には，古川町会議員に当選しており，公務員と議員とが兼務できなくなるまで，およそ1年間，町会議員を兼務している。昭和27年（38歳）には，国府中学校に教頭として転勤し，昭和29年（40歳）から2年間は飛騨地方事務所指導主事を務めた。

昭和31年（42歳）には，国府村立老和気（おいわけ）小学校長に転出した。同校は，複式3学級，児童数104人の僻地校である。この年から，同校は文部省の研究指定校（僻地教育）となることが決まっており，中家の実力が買われての人事であった。ここから中家の活躍が始まる。この年，同校は文部省研究指定校・岐阜大学研究協力校となった。中家は，翌昭和32年7月6日，7日に，全国僻地教育研究大会・社会科研究部会（山口県本郷小学校）で，複式指導のあり方について発表した[2)]。その内容は，複式学級でこれまで行われていた「同時同教材指導」の不合理さを指摘し，「同時同単元異程度指導」でなくてはならない，と主張するものであった。この発表が文部省の初等教育課僻地教育担当の山川武士，東京都の指導主事木川等の目に留まり，知遇を得る。同年，文部省から教材等調査研究会・小学校小委員会委員の委嘱を受け（1年間），文部大臣松永東の辞令を受け取ることになった。中家は，昭和33年8月まで，ほぼ月に2回文部省に出向いている。彼は，東京都指導主事の木川と山梨県の田中と共に『複式社会科指導の手引き』の編纂に携わった。その後，中家は理科の複式指導，算数の複式指導にも参画した。中家は，昭和36年（47歳）に角川小中学校校長に転出し，昭和37年には河合中学校校長，昭和38年（49歳）には飛騨教育事務所指導課長に転出している。そこで，岐阜県の指導主事であった山本弘との出会いがあったわけである。中家は，昭和42年（53歳）に，古川小学校校長に転出している。そして，いくつかの栄転の話もすべて断って，最後まで古川小学校校長の職にとどまり，昭和50年3月に同校校長をもって，教職から退いた。

Ⅲ　「四十年の教員生活　回想録」[3)] にみる中家一郎校長の教育観と，「ふしづくりの教育」の軌跡

この回想録は，中家一郎が定年後に記したもので，昭和9年（20歳）から昭和49年（60歳）までの回想である。本稿では，昭和42年（53歳）に，古川小学校校長として赴任してから昭和49年（60歳）に退職するまでの回想から，彼の音楽教育観に関連する部分，および「ふしづくりの教育」に関連する部分を紹介する。

(1) 昭和42年（53歳）

「(引用者注：古川小学校の）子どもの生活指導や学習態度もよくないので改革しなければならない。私が講堂で新任の挨拶をする時など先生方がドナリちらさねば並べない有様だった」。

「(引用者注：古川小学校の）教育目標をみると，極めて抽象的で教育基本法の目標と変わりないので変更して具体的なものにした。教師の指導目標（引用者注：創造的で主体的な学習態度を養う）と子どもの生活目標（引用者注：①決まりを守る，②ものを大切に，③人に親切に）とにわけてつくった。この両面を徹底すれば子どもの生活態度も変わるし教師の指導方法も変わると確信したのです」。

「本校は県指定の音楽の研究校であるので音楽の研究はたえず続けられていたが，かなしいかな私は音痴で音楽のことはよくわからない。そこで昨年まで県の主事だった山本弘先生が角川の校長となって来たので山本弘先生と，教育事務所の指導主事だった山下一男先生（引用者注：中家校長の後任として昭和50年度から3年間古川小学校校長となった）と，私が教育事務所に居た時指導主事であった中村好明先生が大西小学校長になって居られたので，その3人の先生に毎月1回程度来てもらって指導してもらうことにした。本庁の田中一昭先生も数回来てくれた」。

「昭和43年2月9日は大変寒い日で，大雪の降った直後だったが，研究発表会を行った。おかげさま

で県下各地から400名程の参加者があった。その中には他府県からも数名参加していたし，日本楽器の方も来て居られた。私は始め知りませんでしたが，後に古川小学校の音楽が全国的に有名になったのは，この方々のお陰であった」。

(2)「昭和43年（54歳）」

「昨年音楽の発表をしたせいか，今年は音楽の参観者があり，中には他府県の方もぽつぽつ参観に来るようになった」。

(3)「昭和44年（55歳）」

「学校の方は年々参観者が多くなってきた。職員もそのつもりで毎日の授業も大事にしてくれるし，子どもの学習態度も大変よくなってきた」。

「10月には文部省の真篠先生が見に来られ職員も大いに自信を持つようになった。しかし真篠先生は，文部省の立場もあって内心は指導要領の線にそって各単元を指導しながら基礎指導をするということには変わりなく，本校のように「ふしづくり」の指導で基礎指導をして各歌唱曲とは別で，いわば二本立て案には不賛成のようだったが，兎に角これだけ子どもに実力がついているなら立派なものであり，全国にこんな学校が2，3校あればよいなあと言われた。ふしづくり案はたしかに二本立てで，その日指導する歌曲とは直接的に関係のない場合もある。しかし体育の予備運動だって同じことで，基本的には大いに関係があるのである。ふしづくりは，音楽の基礎指導を系統的に組織立てたものであり，教科書の歌曲は，季節だとか歌詞の難易などによって，学年学期に配分してあり，厳密には系統性に欠けているので，ふしづくりの系統と一致しないのである。従って，教科書の教材配列の方に無理があるのである。だから音楽の指導に困難性があったのである。全国では，古川小学校のふしづくり教育を古川方式と言っていた。……全国の指導主事研修会の時も，真篠先生は，古川方式も1つの方法だが，教科書にそって基礎指導するのが順当であると言われたことを風の便りで聞いたこともある」。

「11月下旬でありましたが，芸大の松本民之助先生が見に来られた。ところが，松本先生からはかなりひどい批判があった。子どもの創ったメロディーは思いつき的なものが多く理法に合っていないし，そんなものに伴奏づけしたって意義がない。もっと学問的に正確なリズムの原型を先に考えさせてからメロディーをつけるべきだと言われた。職員はやや意気消沈した。けれども私には音楽はよくわからないが，先生の言われることは全く学問的で形式的なものだと思った。すべての芸術は，そういう考え方に固着していると新しい創造は出来ない。現実には，子どもの自由な表現を子ども同士で鑑賞していると，だんだん正しい方向に気づいてくる。そこに教育の重要性があると思う。間違っているものをそのままにしておくわけではないのである。その方が効果的なのである。絵をかく場合でも先生の指導や助言で遠近法や透視法がわかっていくのである。それと同じことである。少し松本先生に意見を言ったものだから，その後何度もガリ版印刷の先生の考え方を送って下さった。その熱意には心打たれるものがあったし，何といっても松本先生ほど小中学校の音楽教育の向上のために努力された方はないので，立派な方だと思っている」。

「特に今年度は参観者が多くなり，全国各地から指導主事級の人たちがぞくぞくやって来ました。一面よろこぶべきことであるが，これだけ多くの方がいつとはなく参観に来られて，学校の方も大変なので，来年度からは，月1回参観日を設けることにした」。

(4)「昭和45年（56歳）」

「本年から月1回の参観日を定めたものの，とび入りがあって月に2回，3回と参観に来ることがあり，これならいっそ来年度は発表会をして全国の希望者に見て戴いた方がよいと考えた。それはまだ職員にも相談したことではなかったが，私は一人で想を練っていた」。

「2月頃でした。日楽(引用者注：日本楽器)の小松先生と今岡先生が突然来校されました。何だろうと思っていると，古川小学校の音楽がこれだけ全国的になったについては，音楽教育ばかりでなく何か教育の基本的なものがあるに違いない。それで先生の教育に対する考え方を原稿用紙20枚程度に書いてほしい，とお願いに来られた。……私の教育方針だとか学校経営方針だとか頭にえがいている教育の理想像といったものを一応書いてみたが何だか教育書のようなもので，かた苦しいものになった。……仕方ないからありのままのことを書いてやれと思って，その晩思いつきを書き，それに『音痴の考える音楽教育』と標題をつけました」。

「この年，日楽のピアニカを使用してみてはどうかという話がありました。山崎君からどうしたものかというので，それなら何年生から使用可能か1年3年5年に1クラスずつ実験的に使用させてみた。2学期になって1年生から可能であり，ふしづくりには大変よいことがわかった。職員は1年生入学児童から順次購入させようと言ったが，私は教育効果があるものを1年生から順次では6カ年もかかるので，全校児童に一度に持たすことにした。そのピアニカは22鍵の小さなものであった。音楽部の意見で最小でも25鍵ないと音域がとれないとのことで日楽に対して25鍵のピアニカを2000円以内で造ってほしいと言った。…全校で採用することになったのであります」。

(5)「昭和46年（57）歳」

「あまり参観者が多いので，今年は秋頃発表会をすることを職員会議で発表した。それでも1学期中に200名程参観者がある有様であった」。

「6月には滋賀県の大津市から小松英郎先生が1か月も内地留学にこられたし，7月には関市から吉田須磨子さんが内地留学に1週間こられました。この年は内地留学が多く，新潟県の竹内憲寿先生，千葉県から飯村豊子先生と斉藤よし先生，山形県から及川勝治先生と沼田茂先生，富山県から黒田外二先生，8人の先生がこられました。それぞれ音楽の専門の先生ですが，初めは批判的なことも申されましたが，1週間居て帰られる頃になると，成る程すばらしい。自分の県でもこれを推し進めるつもりだ。この次に又参ります。その時は大勢の先生方をさそい合わせて来ますからよろしくと言って帰って行かれた」。

「10月25日，自主発表会をしたが，大変盛大であった。北海道から九州まで各府県から来られた。幼稚園の先生から大学の先生まで，中には大学の学生まで来られた」。

「この日の発表会は参加者に大きな感動を与えた。特に研究演奏の時などは寂として声なく，感激のあまりポロポロ流れる涙をハンカチで押さえている先生もあった」。

「後から多くの感想が寄せられたが，岐阜県の教育センターの和田三里先生からは，私が30年来考え夢にみて来た教育を今初めてまのあたりに見たという長い手紙が来たし，九州の先生たちは，感想をタイプ印刷の冊子にして，長崎や大分，宮崎からも送ってくださった」。

「全国の先生方の中から10月の発表会に来られなかった方や，今一度見たいという方が沢山あって，第2次発表を年度内にやってほしいという要望があった。…2月に拡大参観日にしたところが，参加申し込みがだんだん多くなって，ついに500名以上になった」。

「8月に福井県へ山崎君と講演にいった。さらに11月初旬に再度福井市に講演に行った。2月11日には，愛知県の豊田市寺部小学校へ講習に出かけた。私と山崎君，それに川上さん船坂さんの4人だった。愛音研の人たち200名ばかり参加されて盛大だった」。

(6)「昭和47年（58歳）」

「本年度も昨年に引き続いて算数を研究課題とすることになった。教科の中で一番格差のある算数を研究し，子どもたちの算数の力を伸ばすことには大きな夢がある。そしてそれは可能なことであると信じている。子どもは，普通の子ならばどの子もすばらしい可能性を持っている，という仮説を実証したいと思う。音楽ではそれができた。算数でもできる筈である。音楽のような感覚的な能力と，算数のような概念的な能力を育てるのとは異なっているかも知れないと思うけれども，どうも長年の教育生活の経験から，その子の能力の発達という点から考えると，同じではないかと思っている。算数の研究の2年目であり大体めどもついているので，今年は学習の仕方を子どもに定着させねばねらぬと思う」。

「本年も参観者は多いことであろう。職員からももう少し制限したらどうかという意見もあり，本年から6月と10月に拡大参観日をつくり，あとはできるだけ押さえていくことにする。6月の拡大参観日には，500名以上の方が来られたし，10月26日の拡大参観日には1000名以上の参加者があり，研究演奏のビデオも専門家が来て録画した。もう先生方も幾度もやるのでそんなに苦労しなくてもよいようになった」。

「夏休みに，宮崎県，愛知県，福井県，大垣地区から講師に来てほしいとの依頼があり，職員が手分けして行った。私と山崎君，川上さん，桑原さんは宮崎県へ行った」。

「同じ8月に私と山崎君が，「ねむの里」に招待された。音楽のサマーキャンプで文部省の真篠先生も来られていました」。

「10月26日の拡大参観日には，1000人以上の参加者があった。今年は昨年の自主発表以上に一段と進歩し，だんだん高次元の音楽に近づいてきた」。

「11 月に広島県に山﨑君，川上さんと一緒にいった。…山﨑君や川上さんが授業をやってみせたのだが，…広島の子どもは一番落ち着きがなく，心がすさんでいた」。

「2 月 5 日の拡大参観日は 300 名位集まりました」。

「この月，愛知県の研究会に 4 人で行った。2 月には，山﨑君と和歌山県に行ってきた」。

(7)「昭和 48 年（59 歳）」

「8 月 22 日，石川県の穴水のサマーキャンプの講師の依頼を受ける。…講演後，30 名位が応接室に集まり話した。そこで 30 歳前後の女教師から，とてもきつい質問を受けた。大変失礼な質問をしましたが，どうも狐につまされたようでよくわからないので，一度先生の学校へお邪魔します，と言われて別れた」。

「10 月の拡大参観日には，例にもれず 1000 名位の参加者があった。午後の研究演奏は体育館であったのだが私の席の後ろへ来て何か話しかける女の先生がいた。帰りに挨拶されたが，穴水では大変失礼なことを申しましたが，お話のとおりで感激しました，とのことであった」。

(8)「昭和 49 年（60 歳）」

「東京学芸大学の木村信之教授と助教授の方が突然来られて授業を見た後，10 月の日本音楽教育学会で古川小学校の特別発表をしてほしいと依頼された。私と松村君とで行った」。

「2 日間の学会の最後に発表した。初め私たちは，大学の先生方の発表を聞いた。長年研究したものばかりだったが，なるほどと感心するようなものはなかった。古川小学校の発表は 1 時間発表し，その後 1 時間質疑であった。私が 20 分，松村君が 40 分発表した。広島大学の先生から厳しい批判があった。けれどもそれは，学問的なことで，それを乗り越えて「ふしづくりの教育」をすれば効果があることで，まだ若い質問だと思った。終わって席に戻ると，おおぜいの先生方が私や松村君のところへ来られて，いろいろ具体的に質問された」。

「10 月 27 日の拡大参観日は 1700 名もの申し込みがあり，いままでの最高だった。授業については心配することは何も無く，先生方にまかせていて十分であった。子どもの力も年々高まっていうことはありません」。

「8 月の夏休みに，私と川上さんとで青森に招かれた。私が 1 時間ばかり講演をし，その後川上さんが実演授業と先生方への実地指導を行った。3 日間，同様に行った。」

「12 月になって著書発行の構想に取り組み，冬休みは，もっぱら原稿書きをした。3 月に原稿をとりまとめ，明治図書に送った」。

Ⅳ 「ふしづくりの教育」の特徴

「ふしづくりの教育」は，30 の段階と 102 のステップ[4]という詳細なカリキュラムによって，創作遊びをとおして高度な音楽能力の獲得を可能にした 2 本立てカリキュラムである。

筆者は，昭和 49 年 10 月 28 日に古川小学校で行われた研究発表会に参加し，第 1 学年の 2 クラスの研究授業，全体会，および総ての学年の学年演奏（音楽劇）を参観し，録音した。本稿では，「ふしづくりの教育」における音楽科授業の特徴を明らかにするために，第 1 学年の 1 クラスの研究授業の録音内容を分析した結果を示す。

1 第 1 学年の研究授業の分析

（机といすを 3 方に移動して，中央に広いスペースを確保している。）

（本文中の♪は，その後が歌われたことを示す。旋律はすべてわらべうた音組成で即興的に歌われており，ラソラとミソラが多い。リズムは（　）内に○譜で示した。V は 4 分休符を示す。）

開始　挨拶，オルガンの間違い　4 回

0 分 35 秒～　♪《げんこつ山のたぬきさん》 5 回

1 分 38 秒～　♪《からす数の子》 12 回

3 分 15 秒～　当番 A：♪ さーみなさん V（○①○ V），全員：♪はあい V，当番：♪カードであそびましょ V。♪カードさん V 出てきてね V。全員：♪はあい V。－リズムカードを自分の机に取

りにいく－全員：♪かーすみ君からはじめてね（○①○①①①○ V)。かすみ君：♪はあい V（○○○ V,）いちばんは V（①①○ V）かたつむり V（①①○ V)），全員：♪タタタタタン V（①①○ V)。かすみ君:♪はあい V (○○○ V) これですよ V (◷◷○ V) －と歌って①①○ V のカードを掲げる。全員:♪あってます V（○◷○ V)。全員:♪次の人 V，B さん:♪にーばんは V（○①○ V)，あーさがお V（○①○ V)。－以下同様。同じように C 君，D さんが続く。－

5 分 30 秒～　5 回目に先生が入る，先生：♪こんどはね V，まつぼっくり V（①◷○ V)。先生：4 回反復後に，先生：♪これですよ V，全員：♪あってます V。

6 分 30 秒～先生・全員；♪カード V カード V カードをしまいましょう V。

6 分 45 秒～　当番 E:♪今度はね V，全員:♪はあい V，当番:♪勝ち負け遊びをしましょうね V，全員:♪はあい V。当番:♪たぬきさん V，出てきてね V，たぬき班:♪はあい V。当番:♪かーめーさん V，出てきてね V，かめ班：♪はあい V。

7 分 25 秒～　当番 F：♪三上さん V 出てきてね，三上さん：♪はあい V。当番：渡辺さんから始めてね V，渡辺さん：♪はあい V。三上さん：♪いちご V，渡辺さん：♪タンタンタン V（○○○ V)，全員：♪あってます V。♪つぎのひと V，かめ班の次の人：さくら，たぬき班の次の人:♪タンタンタン V，全員:♪あってます V。同様に，第 3 回:♪あそびましょう V，第 4 回:♪あーさがお V，第 5 回:♪こいのぼり V，第 6 回:♪さくら V，第 7 回:♪たぬき V，第 8 回:♪かめ VV，第 9 回：♪まつぼっくり V（これだけ間違い）第 10 回：♪こぐま V，と続く。

9 分 00 秒～　全員:♪おわりました V(✇◷○ V)。全員:♪かめさんが勝ちました V。全員:♪よかったね V，かめ班:♪ありがとう V。全員:♪たぬきさん V がんばってね V，たぬき班:はあい V。9 分 40 秒～当番 G：♪こ－んどは V よーにんぐみであそびましょ V。－全員が 4 人一組に分かれて賑やかにリズム遊びをする。－

12 分 33 秒～　オルガンの《こいぬのマーチ》のミュージック・サインで鍵盤ハーモニカの用意。

12 分 45 秒～　先生：♪つぎはね V，全員：♪はーい V，教師：♪まね吹き遊びをしーましょう V，全員♪しーましょう V。次の当番の 1 人が鍵盤ハーモニカで:♪ドレミ，全員で模奏，全員:♪タンタンタン V（○○○ V)，3 回反復。同様に，ドレドを 3 回，レレドを 3 回，レドレを 3 回反復。(最初のドレミ以外は，なかなかそろわない。第 3 回になると少し揃いはじめる。)

14 分 35 秒～　今度は先生がまね吹きを提示。ゆっくりミレド。ほとんどそろわない。4 回試みるが，それで中止。先生：また今度ね。《ちょうちょ》で鍵盤ハーモニカを収納に。

16 分 00 秒～　既習曲《おやゆび父さん》《どんぐりさんのおうち》《あそびましょう》《トンクルリン　パンクルリン》の斉唱・合奏。すべて，児童が指揮，伴奏する。伴奏も児童が作った独自のもの。

20 分～　教師：歌を覚えたからお遊戯を作って選びましょう。はじめは 1 人で作ってね。
その後，お遊戯作りが，1 人で　→　グループで　→　クラス全体へと広がっていく。

2　考察

全体で 48 分 31 秒の授業で，ふしづくりの活動が行われたのは 16 分弱であった。この時間のなかに，「ふしづくりの教育」の基本的な特徴が示されていた。それらの特徴を以下に示す

(1) ソロが多用されていた

①3 分 15 秒～からの箇所では，当番の A さんは，「♪さーみなさん V(○①○ V)，♪カードであそびましょ V，♪カードさん V，♪出てきてね V」と 5 小節をソロで歌っている。かすみ君は，「♪はあい V（○○○ V)，♪いちばんは V（①①○ V)，♪かたつむり V（①①○ V))」，「♪はあい V（○○○ V)，♪これですよ V」(◷◷○ V) のカードを掲げる)，と 5 小節をソロで歌っている。

②それ以後，B, C, D さんもそれぞれ 5 小節のソロを歌った。この活動で，5 人の児童がソロを担当した。ソロの利点は，自らの声を自ら確認することができることである。さらに，クラスの全員が自分の声を集中して聴き取ってくれているということは，非常な高揚感と集中力をもたらすであろう。

③6 分 45 秒からの箇所では，次の当番の E さんは，「♪今度はね V，勝ち負け遊びをしましょうね V，

♪たぬきさんV，出てきてねV，♪かーめーさんV，出てきてねV」と7小節のソロを担当している。

④7分25秒からの箇所では，次の当番のFさんは，「♪三上さんV，出てきてねV，♪渡辺さんから始めてねV」と4小節のソロを担当している。渡辺さんは，「♪はあいV」と「♪タンタンタンV（○○○V)」と2小節のソロを担当している。三上さんは，「♪いちごV」，と1小節のソロを担当している。同様に10人ずつの対抗戦となっているので，この箇所では計21人がソロを担当したことになる。

⑤同様にそれ以下の箇所をカウントすると，12分45秒～からの「まね吹きあそび」で4人が鍵盤ハーモニカのソロを担当している。4曲の既習曲の斉唱・合奏では，それぞれ指揮者，オルガン担当者，打楽器担当者，計4人，合計16人がソロを担当した。

⑥《トンクルリン　パンクルリン》では，6つの班からの6人が全員の前でお遊戯を披露した。

⑦これらをすべて総合すると，40人以上の児童が，何らかの形でソロを担当したことになる。

(2) 反復が多用されていた

①35秒～からの《げんこつ山のたぬきさん》は5回，1分38秒からの《からす数の子》は12回，反復して歌われた。前者はじゃんけんをして全員が1つの集団になるまで，後者はおしりをねらわれた児童が外れて最後の1人になるまで，連続・反復して歌われた。これらの歌を歌う際のルールが定着していたために，児童の集中力は最後まで途切れることはなかった。

②3分15秒からの「カード遊び」では，その日に担当する児童はあらかじめ決まっている。A君は，「♪かたつむりV」と「♪これですよV」とを2回もソロする機会を与えられ，はつらつとその機会を生かした。それらのソロは，クラスの全成員が最大限の集中力で期待しながら聴いている。このカード遊びでは，他に3人，計4人が同様なカード遊びを反復し，ソロの機会をもったのである。

③さらに，6分45秒からの「勝ち負け遊び」では，かめ班とたぬき班から，10人ずつ，計20人が出場して，一方が木や花や果物や生き物の名前を歌い，他方がそのリズムを「タンタンタンV」等で歌って応える。合計20人が上記の「勝ち負け遊び」を反復し，ソロの機会を得ている。

④12分45秒からの「まね吹き遊び」では，4人の児童が鍵盤ハーモニカで，3回ずつ反復し，ソロをする機会を得ている。

⑤20分からの，《トンクルリン　パンクルリン》にお遊戯を振り付ける活動では，前奏＋1番＋2番の範唱テープが，20回以上も継続して反復されていた。それらの反復の間に，各児童が，各班が，それぞれの振り付けを決めてゆく。そして最後に，各班の振り付けのなかから，この学級の振り付けを挙手によって決めている。そうした集中力を保った反復が，見事に実践されていた。

(3) 児童が主体的に授業の進行に関わっていた

①3分15秒からの「カード遊び」は，当番の合図で始まった。（そうした既定の授業の流れがあった。）

②この遊び（活動）で4人の児童がソロの機会を得たが，その人選と順番は，既定のものであった。

③6分30秒の「カード遊び」も，当番の合図によって終了が歌って告げられた。

④6分45秒からの「勝ち負け遊び」の開始も，当番によって告げられた。

⑤この遊びは，2つの班の対抗で競われたが，そのグループも当番によって告げられた。

⑥この遊びは，各班10人で競われたが，その人選と順番は，既定のものであった。

⑦9分00秒の「勝ち負け遊び」の終了は，当番によって告げられた。勝った班と負けた班への呼びかけも，当番によって行われた。

⑧9分40秒からの「4人組遊び」も当番によって告げられ，4人組のメンバーも既定のものであった。

⑨12分45秒からの「まね吹き遊び」で鍵盤ハーモニカを範奏する4人とその音列は，既定のものであった。

⑩16分00秒からの既習曲の斉唱・合奏では，4曲の順番は既定のものであったし，指揮も伴奏も児童であった。各曲の伴奏も，それぞれのグループの児童が話し合って作ったものであった。

(4) グループ活動が重視されていた

①7分25秒からの勝ち負け遊びでは，1分35秒間のグループ活動が行われた。

②9分40秒からの4人組でのリズム遊びは，2分53秒間継続した。

③16分00秒からの既習曲の斉唱・合奏では4曲が演奏されたが，それらはすべて異なるグループによって指揮・伴奏された。それらの伴奏はすべて各グループの児童たちの自作のものである。曲順も既定であり，スムーズに交代ができていた。

④20分49秒からの《トンクルリン　パンクルリン》へのお遊戯（振り付け）では，グループによる振り付けの決定がおよそ25分間行われた。

(5) 教師の役割

上記のように，一見すると児童主体で授業が進行していたが，それでいて教師は重要な役割を演じていた。

教師の発言・教授行為は以下であった。

①冒頭の挨拶，オルガン演奏。

②35秒から3分15秒，《げんこつ山のたぬきさん》と《からす数の子》のオルガン伴奏。

③「カード遊び」の最後に5人目として介入した。新しいリズム：まつぼっくり（①◷○ V）を提起した。4回反復して，5回目に「♪これですよ V」と正しいリズムカードを提示した。

④12分33秒，オルガンの演奏（ミュージック・サイン）で，発言することなく，鍵盤ハーモニカを準備させた。児童は無言のままで，すばやく机まで移動し，鍵盤ハーモニカを用意した。

⑤14分35秒，「まね吹き遊び」に，5人目として介入した。新しいフレーズ，ミレドを提起。ゆっくり鍵盤ハーモニカで吹く。4回試みるも，児童の演奏は揃わない。「また今度ね」と発言し，収束へ。《ちょうちょ》のミュージック・サインで鍵盤ハーモニカをケースに収納し，机にしまった。

(6) 教師の発言時間

本時の総時間は，48分31秒であった。先生は，どのくらいの時間発言し，主導的役割を演じたのだろうか。次のような条件で，総時間を計算した。

①教師が発言した時間。

②教師が伴奏をした時間。

③教師が介入して，新しい課題を提示した時間。

これらをストップウオッチで計算したところ，13分14秒であった。授業全体の，わずか27.28%であった。これらから②教師が伴奏した時間，を除外して，教師が主体的に授業の展開に関与したのは，わずかに3分45秒であった。これは，授業全体の7.7%であった。名人芸級の授業である。それだけ多くの部分を児童の自主性に委ねることが「ふしづくりの教育」の大きな特徴である。

当時の中家一郎校長の「先生の発言の長い授業は，失敗授業である」[5] という指導が示唆する点は極めて重要である。

（以下は本稿（2）に続く。注および引用・参考文献，英文アブストラクトは（2）の最後に記載する。）